

信仰の勝利を得よう

「テモテへの第一の手紙」6章11節から16節までを朗読。

12節「信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである」。

この記事はテモテというパウロの愛弟子に宛てて語られた手紙の一節であります。テモテという人は両親もイエス様の救いにあずかったクリスチャンホームに育った人物であります。大変素直な、良い信仰を持った人物ではありましたが、パウロにはもう一つ物足りないと思うところがありました。それはあまりにも優しすぎるのです。一方、先生であるパウロという人は、ご存じのように非常に強い人でありまして、しっかりと信仰に立ったら揺るがない、頑（がん）とした強さがあります。極めてテモテとは好対照でして、そういうところがちょっと弱い。ですからパウロとしては、良いのだけれどももう一つ物足りない、パウロはまるで我が子のようにテモテを愛しておったのです。何かにつけていろいろ助言もし、また手助けをし、教え、語っています。この『テモテへの第一の手紙』をお読みいただければ、そこに細かく具体的な歩み方について語っています。

これはまた私たちの信仰生活の指針といたしますか、一つのモデルでもあります。だから、「テモテへの第一」と「第二」

の二つの手紙が残されています。その中に「こういうことは自分の生活にもあるな」と思うことが具体的に多々ありますから、しっかりとお読みいただきたいと思えます。昔の話としてではなく、いま自分に語られていることとして読んでいただけたらいいと思えます。この二つのテモテへの手紙は、神様が私に語っていらっしゃる、主に仕えていく僕（しもべ）としての歩み方について、大変示唆を与えてくれ、励まし、また教えてくれる記事であります。

その中で「信仰の戦い」について語られています。信仰生活は、安心立命という、よく言われるように、神仏をまじめに拝み、また信心を持ちさえすれば、生活は事もなく、問題もなく、悩みもなく、ことごとく順調に行ってくれるであろうと、そういうことを期待するのが、世間一般の信仰というものです。私どもも神様を知らなかった、イエス様のことも知らなかった時代を過ごして、不思議な導きによって、今はイエス様を救い主と信じる信仰に立たせていただいた。また万物を創造され、全能なる力の神様がいますこと、神様は、絶えず私たちの内に神の霊を、力を注いで、神様の御心にかなうもの、神様の願っている者へと私たちを造り替えてくださる、と信じて歩んでいる今の時であります。現実の生活には次から次へと悩みがあり、艱難があり、心配があり、思い煩うことが数多くあります。「いくら信仰していても何の役に

も立たん」と、時にそういうことを言われます。「ちっとも変わらない」「何年話を聞いていても、いつまでも心配は心配、悩みは悩み、それは一向に減ることはないではないか」という。

ところがここに「信仰の戦い」とあるように、実は神様を信じ、イエス様を救い主と信じて、常に神様との交わりの中に生活して行く時、それは平坦なこと、たやすいことでないことは事実です。「何がか？」という、私たちはこの世でなお、肉体をもって生きている。どうしても生まれながらの肉性といいますか、自分の持っている肉の力、生まれながらの神様を認めようとしな、神様を押しつけようとする力、そういうものに私たちが縛られて、生きてきた。そして確かに今はイエス様の十字架によって古い自分に死んで、今はよみがえった主イエス・キリストが私たちの内にあって生きて下さる。キリストが命となって生かされていると信じてはいますが、しかし、現実の実際的な日々の歩みには、やはり目に見える事情、境遇、また聞くおとずれ、また置かれた様々な解決しなければならぬ問題や、迫られる一つひとつの出来事があります。そこで大切なことは、その具体的な日々の問題や悩みや思い煩いの中にあって、目に見えない神様をどのように信頼し、そこに自分の心を、思いを全面的に懸ける。神様に委ねきって行くかどうか、これが問われます。だから、朝起きてから夜寝るまで、いろいろなことで、小さなことも大きなことも、そういう問題にあって常に問われます。「あ

なたはそれで良いのか？」と。イエス様を信じなかったら、イエス様のことを知らなかったら、神様のことも知らなかったら、平気でおられたはずのことが、つい聖書を読んでしまったがために、「やっぱり、これはいかんのではないか」「こういう私の心は、イエス様の思いとは違うな」と、あるいは「神様が私に求めているのは、こうでないよね」と、いろいろなことでチクリチクリと、イエス様が時々邪魔をしてくる。邪魔をするというか、むしろ本来はイエス様の側に私たちが立つことが幸いな道ですが、そこが実は戦いです。それは日々の生活の具体的な一つ一つの中で出てくる事です。だから、何も事がなくて、ただ平穩無事に、穏やかな生活、「これでもう感謝、感謝」と言えるならばそれは幸いだと思えますが、なかなかそうは行かない。……行かないですね。平穩無事で、事のない日々を過ごしたいと思いつつも、次々と問題が起こってくる。実はこれが信仰の戦いであると同時に、神様が私たちに求めている事でもあります。そういう日々の小さな出来事、日常茶飯な出来事の中で、常に「神様はどの道を歩まされようとするのか?」。私がしたいと思う、私はこうありたい、私はこうなりたいという願いといいますか、私たちの感情であるとか、情動、情欲であるとか、いろいろなものが身についている。どうしてもたやすくそちらへ引かれていくのです。人情であるとか、友情であるとか、この世の中の様々な関係、人間関係の中で、「あの人がああ言うから仕方がない」「この人がこう言うからこうしよう」「あの人

が怖い」とか、恐れがあります。また自分のプライドという、しょうもないものがあり、「私はこういう身分……」「私はこういう氏素性の者」「こういう人生を歩んで来た」「私にはこんな経験があるから、そんなことはできない」とか、いつも自分の中で働く力がある。神様を畏れ、「神様はどう求められるか？」ということよりも、他のことで心が右往左往する。これが私たちの日々の現実であります。いろいろなことで右にするか、左にするか、進むか、とどまるか、常に選択と決断に迫られます。つい、生まれながらの習性といいますか、私たちは肉にあって生きていますから、肉の思いのほうが先立つわけであります。感情のほうが先、情愛とか、そういうものが出てきます。どういうふうにしてそれを自分の中で受け止めるか？これが実は戦いです。というのは、神様の御思いでない、人の思い、神様を私たちから消し去ってしまうような力が働いてくるからです。この信仰の戦いを戦うことが求められているのです。しかも、それは外側にある「あの人と戦う」「この人と戦う」「この制度と……、この社会の仕組みと……、こういう組織と戦う」というものではありません。そういう時代も確かにあるにはあったでしょう。またこれからあることも確かだと思えます。

かつてキリシタン弾圧という、キリシタンが迫害を受けた時代があります。もちろん今でも世界では、なおそういう宗教対立といいますか、宗派間の対立によって教会が焼かれたり、また捕らえら

れて殺されるというような事件も多発します。幸い今、私たちは日本に住んでいて、『信教』の自由といいますか、何を信じて、どういう思想、信条の下にあらうとも、これは許される時代になっていますから、自分の外側の勢力、力と対抗し合う、そういう構図にはなっていません。しかし、そういう時代がかつてあったことは、皆さんもご存じの通りであります。キリシタン弾圧の時、時の権力者たちがキリシタンを捕らえて、そして様々な苦しみに遭わせて転向させる。転ばせるといいますか、その信仰を捨てさせようとしていました。その時の戦いはまさに信仰の戦い、文字通りであります。

私の母方の実家がそうであります、五島列島出身で、その小さな村の代官をしていたのです。代官屋敷にはその当時、踏み絵を踏ませる物が残っていた。その息子の一人、彼は今の福岡大濠公園教会の始まりになった人物であります。若い時、福岡へ出て来て、事業を興し、苦勞を重ねて、やっと生活を築き上げた。その時に信仰へ導かれて、イエス様を信じるようになった。まずは奥様が信仰を持たれたのです。私の母の伯父叔母になりますが、おじはまじめな人物であっただけに、かたくなに信仰に入ることを拒みました。それは自分の先祖は、キリシタンを弾圧した。踏み絵を踏ませた時代に生きてきた自分、そのことがどうあっても許されるとは信じられない。その葛藤が強かったのです。ところが最終的に主イエス・キリストの赦しの中にあることを信じて、救いにあずかって、

その生活がガラッと180度変わりました。やがて自分の家を解放して、イエス様の福音を伝えようとしたのが、「浜の町伝道館」という教会の始まりであります。

そういう外側から激しく責め立てられる弾圧の時代、そこで信仰を持ち続けようとして戦う戦い、これはそれぞれの時代に応じて変化して行きます。しかし、どんな時代を通して変わらない信仰の戦いがある。それは私たちの内なるものとの戦いであります。私たちの心にある、私たちの中にある思い、感情であるとか、情欲であるとか、あるいは自我性という己を義とする思いです。

11 節に「しかし、神の人よ。あなたはこれらの事を避けなさい。そして、義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい」とあります。ここに「これらの事を避けなさい」と初めに言われていますが、「それは何かと?」。それがすぐ前の6章1節以下から10節までに細かく語られています。4節以下に「彼は高慢であって、何も知らず、ただ論議と言葉の争いとに病みついている者である。そこから、ねたみ、争い、そしり、さいぎの心が生じ、5 また知性が腐って、真理にそむき、信心を利得と心得る者どもの間に、はてしのないがみ合いが起るのである」。これはまさに人の世の中の姿です。争い合い、言葉を尽くして罵(のし)り合って、激しいがみ合いが起こってくる。どうですか? 皆さん、こういう話は日常茶飯に聞いているでしょう。今でもその渦中にいる方もおられるかもし

れない。「あいつがどうだ」とか、「こいつがどうだ」とか、そういう生き方、それに対して7節に「わたしたちは、何ひとつ持たないでこの世にきた。また、何ひとつ持たないでこの世を去って行く」。まさにその通りです。私たちが生まれた時、札束をもって生まれてきたら、親は大喜び、大歓迎ですが、そんな人はいません。誰も何も持たずに裸で生まれてきます。また死ぬ時もそうです。いくら蓄えてもみんな残して行く。残った人は大喜びですから、蓄えていただいたら良いのですが、まさに何も持たないで出て行くのであります。また8節に「ただ衣食があれば、それで足れりとすべきである」。日々与えられる、神様が養って下さるその分をもって、満足していなさいと言われる。ところが、なかなか今の物質的な世の中にあってはそうは行かない。流行を見、また様々なコマーシャルや宣伝の中で、あちらに興味をわき……、人の欲が掻き立てられる。そうすると、あれも要る、これも要る、「私は乏しい、貧乏だ」と思う。そんなことはない、まことに豊かな時代です。感謝がない、喜べない、つぶやきと苛立ちと憤り、常に何か欠乏症の中で、フラストレーションの中で生きているのが多くの人々ではないでしょうか。信仰にあずかった私たちも気が付かないうちに、そういう中に落ち込んでしまう。9節に「富むことを願い求める者は、誘惑と、わななどに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである」。「私はクリスチャンですから……、私はイエス様の救いにあずかっ

ますからそんなことはありません」とはなかなか言えません。口先だけで言うだけでなく、自分の心をよくよく見ると、いくらでもそういう思いが出てくる。10節に「**金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした**」と。まさにこの通りであります。様々な欲に支配され、心が我利我欲に引かれていく。そして神様を忘れる。イエス様のことを忘れてしまう。これがいちばんの致命傷です。クリスチャンとは名ばかりになって、していること、語ること、思うこと、どこにもキリストの「キ」の字もない。香りもない。香りどころか欠けらもない。これではまことに申し訳ない。イエス様の救いにあずからせて下さったのは、何のためか？ それは私たちの性状、性格、内側から全て造り替えて、「**だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である**」（コリント第二5:17）とあるように、全てを造り替えて、私たちがキリストのかたちに形作って下さる。イエス様のすがたにまで私たちを変えようとしている。神様の進められる再創造、私たちが造り替えるわざの中にいま生かされている。だから、そのことを絶えず自覚して行きたいと思う。イエス様の姿かたち、キリストの形を得るまで、なお神様は熱心になって私たちに関わって下さる。

親でもそうですが、期待する子どもに対しては大いに叱ったり懲らしめたり、いろいろなことをします。しかし、能力

のない子、「これが彼の精いっぱいのことだな」と思う者に対しては、手加減をします。だから、いろいろな問題の中に置かれる人ほど神様のご期待が大きいのです。“這（は）えば立て、立てば歩めの親心”と言います。まさに親心をもって神様は清め、造り直し、新しくし、神の霊といのちと力に満たして生きるものに変えようと、いろいろなことの中に置かれるのです。だから「これらの事を避けなさい」。「避けなさい」といわれて、「避けました」と二つ返事で事が進むようにはならない。ここが戦いです。それはまさに血のにじむような戦いであるかもしれません。苦しいことでもあります。イエス様に従うのか、あるいは自分の肉の思いに従うのか？ 自分の感情に従うのか？ ここが私たちにいつも問われることです。

11節の後半に「**義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい**」と。「義と信心と信仰」、神様の義を求めて行く。日々の生活の小さなことでも……、夫婦の間でも、親子の間でも、つい「私が正しい」「私の言っていることに間違いがない」と思ってしまう。「そんなことをしては駄目よ!」と言いますが、本当に駄目なのかどうか？「いや、絶対駄目!」と自分が勝手に神様になって……。本当にそれが正しいかどうか、これは分からない。神様をご存知です。義を求めるとは、神の義を信じて、神様の導きに委ねることに尽きます。相手がこう言う、こちらの人もこう言う、右と言ひ、左と言ひ、自分もよく分からない。あるいは「自

分はこうだ」と思うことがある。そういう幾つかの選択肢の中で、神の義を求め、必ず神様が「よし」と思うことをして下さるなら、それがベストです。だから、自分を出すことがいけない。自分のことを主張することがいけない。ここが義を求めることですが、これがなかなかできにくい。つい「あんなことを言って、一応譲っておくけど、やっぱりあれは駄目だと思うわ、私の考えのこちらでない」と、夜中に目が覚めるとカッカカッカして、「でも、もう仕方ない。あの時『好きなようにしたら』と言ってしまったから、でもこれからああなる、こうなる」と、勝手に自分で先行きを次から次へと想像をたくましくする。これが私たちのいちばん悪い所です。「義と信心と信仰」、信心も信仰も同じように思いますが、私たちが神様を信頼することです。また神様が全てのものの根源であることを信じて行くこと、これが信仰であります。

そして「愛と忍耐と柔和」、絶えずこのことを心掛けて行く。何だか自分の正しさが否定されるような、自分の主張していることに理があるように思う。その時、他の人から違うことを言われてしまうと、カッと腹が立つ。まさにそこで「忍耐と柔和」、いいじゃないですか、相手がそう言うならば。「それはそうね、あなたがそう思うのだったら、是非そうなさったら良いじゃない」と譲れば良いのです。「いや、譲ったら、どちらの方向へ行くか分からない。私の目の黒いうちはそんな勝手なことはさせられん」。そ

んなことを思うから間違う。どんなに皆さんが、目を見張ってみても、神様はその人に必要なことを必ず成し遂げられる。だから、神を信じることは、自分を捨てるのですから、気持ちがとても楽なのです。それを捨てるまでが戦いであるのは確かです。いま一度、この信仰の戦いを戦って、本当に神の義、神の力と恵みを受けて、自らが造り替えられるのです。

少しでも私たちの内にキリストのかたち、キリストの香りを放つ者へと変えられたいと思う。私たちが造り替えるのは誰が造り替えるのか？「これは霊なる主の働きによる」と、「コリント人への第二の手紙」(3:18)にあります。御霊が私たちの内にあって、思いを与え、願いを起こさせ、私たちの思いを導かれるのであります。だから、常に、その戦いの中で、自分が力を尽くして頑張っていて、何とか自分の心を一生懸命に押さえ込んで、なかなか押さえ込めない。その時、御霊の導きに委ねて行く。神の霊が常に私たちの内に働いて下さるのであります。自分はこうありたいと思いながら、できない自分にぶつかった時、そこでどうするのか？そこで御霊が私のうちに働いて下さることを信じて、その御霊の力に委ねる。これを努めて行くことです。

「エペソ人への手紙」6章10節から13節までを朗読。

12節に「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく」とあります。信仰の戦いとは、外側の人、あの息子のため、

あの主人のため、あの子のために、あの人この人、そういう人と戦うものではないのです。「あの人があんなことを言って、ようし、今度コテンパンに言い負かしてやろう」と、そういう人との戦いでなく、その人とのいろいろな軋轢（あつれき）といいますか、摩擦が起こった時、自分の心がどんな状態かを知ることです。

その心に働いているのは何か？ それがここに言われている「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦い」、「悪の霊に対する戦い」なのです。「私の心にはそんな悪の霊なんかいやしない」と、聖人君子のような顔をしています。しかし、決してそうじゃありません。私たちの内に、まさに悪の親玉である天上にいる悪の霊が働いてくるのです。どういう形ですか？ 「あんたが大將、あんたが言うことは大丈夫、間違いない」「そうそう、やはり言わないかん、いかん」、どんどん後ろから押してくる。これは悪の霊です。「ここで黙っていても駄目、あんたが軟弱だと思われる。相手から馬鹿にされるから、ここでひと言言わなくてどうする」と、心の中に声が聞こえてくるじゃないですか。あるいは、右にするか、左にするか、「ああしたらこのお金が足らなくなる」「こちらは取ると時間が無くなる」「こちらは健康がどうのこうの」と、どうしようか、どうしようか、惑わせる力はどこから来るか？ 天上にいる悪の霊です。誰の心にもそういう悪の霊が働いてくる。それに対して戦わなければいけない。霊の戦いとは、まさに

ここです。その中にキリストの霊も働いてくる。自分はどちらの側に立とうとするのか？ ここが、常に問われるところです。

ピリポ・カイザリヤ地方へ（マタイ 16：13～）イエス様が弟子たちと出掛けられた時に、「世間の人々はわたしのことを誰と言うか」と弟子たちに問われて、ペテロが「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と、イエス様を喜ばせるような正解をしました。そのときイエス様は「この事をあなたにあらわしたのは、血肉によるのではなく」と、「あなたの努力や知識、勉強によって得たのではない」と。「そうではなくて、天の父なる神様が、あなたにこの事を教えてくださったのです」と。良かったと、大喜びをして、イエス様はどうとう天国の鍵までくださった。大盤振舞をした。その後です、イエス様が「これからわたしはエルサレムへ行って捕らえられ、そして十字架にかけられ、死んで三日目によみがえる」と、イエス様の救い主としての使命について語られた時、ペテロはびっくり仰天、イエス様を「ちょっとこちらへ……」と、隅に呼び寄せていさめたと、叱ったのです。「主よ。とんでもないことです。そんなことは言わないで下さい」と、ペテロは引き止める。まさにそれは天上にいる悪の霊の働きです。その時イエス様は「サタンよ、引下がれ、あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と言われた。私たちにもそれがあつた。天上にいる悪の霊は、私たちの側に立ってくれるのです。「そうよ、そうよ、あな

たが気の毒よ、そんな目に遭ったのだから、いいよ、いいよ、そのくらいひと言ぐらい言わな、何も後悔することはない、ああ立派、よく言えたよ」と言ってくれる、おだててくれる。よしよしとなでてくれるのは、悪の霊です。

逆に、キリストの霊、主の霊に立つ時、神のことを思うのです。「これは神様が喜んで下さるに違いない」「こういうことを語ることができたのは、神様が私にこのことを言わせて下さったんだから、感謝です」と、主に対してつながる思いになる。それとも自分が褒められ、尊ばれ、認められることを自覚するのか？ ここがいちばんはっきりとした境目です。だから、信仰の戦いは、実に分かりやすいのです。「いいよ、いいよ、あなたのために何でもしてあげるから……」と、すると次から次へと要求が出てくる。言った以上、「仕方がない、言ってしまったのだから……、まあいいか」と良き思いで始めたことが、次にまた要求が出てくる、これも出てくる。そうすると、だんだんつぶやく思いが湧いてくる。「どうして私が、あんなことまでしなきゃならない」、不平や不満が爆発する。その時立ちどまって、「いま私のこの思いは、主が喜ばれるだろうか？」と、神様のほうに思いが向くか向かないか？ ここが勝利の秘けつです。朝起きてから夜寝るまで、どんな時にもいつも自分の心に思う思いが、誰を思っているのか？ イエス・キリストを思う思いがあるのか？ そこに心を向ければ、一瞬にして、天上にいる悪の霊に打ち勝つことができるので

す。ペテロもそこでイエス様から「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と叱責されます。この場合の「人」は、自分自身を含めてです。自分の立場、自分のメンツ、自分の利益、自分の何かを求めようとしているならば、それは天上にいる悪の霊が私たちに支配している時です。「主が何とおっしゃるのか？」「イエス様は何とおっしゃるのか？」「主が喜ばれるのは何だろうか？」。絶えずよみがえりの主を前に置いて、その方に心を向けること、これを努めて行く。これが信仰の戦いです。

「テモテへの第一の手紙」6章12節に「**信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい**」。イエス様の救いにあずかって、神の民とせられ、この地上にあつて、なお肉体をもってこの戦いの中に置かれますが、しかし、私たちの戦いが終わる時、この地上の使命を果たし終えたならば、喜んで永遠の御国に帰らせていただく。そのためにこそ、いま神様が、私たちを清め、整え、御国にふさわしい者へと変えて下さるばかりでなく、私たちを通して神のいますことを証しさせようとしている。語らせようとしています。だから、12節の後半に「**あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである**」と、テモテのことを褒めています。おそらくテモテもいろいろな戦いの中にあつたのです。その中で主に従う道を選び取って行きました。時にはそれは厳しい選択であつたかもしれません。

私には兄弟姉妹が 6 人いました。生まれて半年で亡くなった弟と、それから 2 週間目で亡くなった弟と二人、豊と恵という子がいた。豊だったと思いますけれども、生まれて半年で亡くなりましたが、夕方から熱を出したのです。ところが、その時ちょうど製鉄所の起業祭の時です。中央町を中心に祭が行われていました。そこで市内の教会が協力して、伝道集会をすることになっていた。その日、たまたま前田教会が当番になっていた。どうしても父が出掛けなければならない。子どもが発熱し、グタッと悪い状態になっていた。父はその時、戦いました。集会を断って、子どもの看病をすべきだろうか。しかし、伝道は自分たちのためではないから断ることはできないし、決断を迫られた。その時「真剣に祈った」と父の証に語られています。その時、もしこの子が死ぬべきは死ぬべし、主が与え主が取り給うならば死の時がくるに違いないから、自分がいくらそばにいても、この子が治るわけでもないから、いま自分がすべきことは主に仕える僕として、その御用のために出掛けることしかない。祈りに祈って、一つの決断を下したのです。そして夕方からその集まりに出掛けました。そして、夜九時か十時ごろ……、今のように携帯電話があって、様子を聞けるわけではないから、帰るまで何の音沙汰もない。どうなっているか心配しながら、父も心せかれて帰った。何と帰って見たら、その子の熱が引いていて、そして元気になっている。父は、「本当に主に仕えることができる喜びは、こういうことなんだ」と。そのいちばんの戦い

は、自分の中に「主に喜ばれる道であろうか?」「この子のために、この家族のために……」と、人を思う思いに立つのか。絶えず私たちはそこを問われる。

私たちの信仰の戦いを戦わなければ永遠のいのちにあずかることはできません。しかし、戦うとは、私たちが常に主に思いを向けることです。「**ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい**」(テモテ第二 2:8)。どんなことでも、「これは主のためであるのか?」「これは主が喜ばれるであろうか?」「私は誰のことを思っているのだろうか?」、たとえ自分の愛する人であり、掛け替えのない相手であっても、人のためだったら、それは悪の霊の働くところです。愛の業に見えても、それが主の思いと離れていけば、それは腐敗です。そこにはいのちがありません。

私たちはいつもこの二つの間に立たせられています。与えられた地上の旅路の中で、信仰の戦いを勝ち抜いて、やがて勝利して行きたいと思う。「永遠のいのちを獲得しなさい」、約束を具体的に手にするまで、地上の旅路をしっかりと戦いぬいていきたいと思えます。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。